



私が留学していた時、大切にしていたもののベスト3の中に、辞書がありました。辞書は英語で生活を送るにあたって必要不可欠なものでした。思えば中学生の頃に初級者用の辞書を買ひ、授業で引き方を教えてもらってから、高校でも大学でも辞書は必ず鞆の中に入っているほど身近なものでした。

現在では、教科書巻末の「単語の索引(日本語訳付き)」で事足りると考える中学生がいることは確かです。そんな彼らに、辞書を身近に感じ、自主的に辞書を使うきっかけを与えることのできる活動の1つに「早引き競争」があります。

とりわけ中学1年生に対して、辞書に親しませるという目的においてこの活動は有効です。

私が勤務する中学校では、クラス全員分の英和・和英辞書を所有しています。それを全員に配布し、班で協力して単語を調べます。班の中で順番を決めて、調べた答えを1人1問ずつ黒板に書き出すのです。速く正確に答えを書いた班にポイントを与える、という単純な活動ですが、生徒は熱中します。以下が問題の例です。

- ①「see」と「look」の違いを調べなさい。その違いがわかる例文を1つ書きなさい。
- ②「the first floor」の英国での意味は。
- ③「トイレ」の英語での言い方を3つ答えなさい。

①は「見る」という同じ日本語に訳される言葉でも、英語ではニュアンスが違うということに気づかせる問題です。用例を活用することで、その単語のそれぞれの使い方を学ぶことができます。②は英国と米国では、意味に違いがあることを知ってもらうための問題です。[米]1階、[英]2階となり、生徒は文化の違いに触れ、言葉との密接な関係に気づく機会になります。また first で調べるのか floor で調べるのか、という疑問も出て、班の中で相談しながら解決していくことができます。

③では、日本語の「トイレ」に当たる言葉が英語ではたくさんあり、時と場合とで使い分けなければいけないことを伝えることができます。辞書には語の説明と共に用例が載っているので、どのような状況でどの語を使うべきかが容易に判断できます。またこの問題は和英辞書で調べると簡単です。生徒が、英和と和英の2つの辞書をどう使い分ければいいのかを検討する良い機会にもなります。

このように、説明したいことを組み込んだ問題をゲーム形式で出題し、生徒が答えを探す過程でその意図に気づかせる、という「しかけ」を提供できるのが「早引き競争」の醍醐味です。意味だけでなく、発音、品詞に関する出題をすることもできます。

「早引き競争」は辞書の使い方を知ることが目的でしたが、学年が上がると辞書を手段にした活動が多くなります。「公開ブレインストーミング」は、リーディング前に2人1組でこれから読む文のテーマやタイトルから連想される英単語を、制限時間内にできるだけたくさん黒板に書き出すという活動です。2人に1冊だけ辞書を渡し、1人は辞書担当、もう1人は単語を書く担当とします。この活動には、情報を共有することでテーマに関する語彙や背景知識を増やすというねらいがあります。発想力豊かな生徒たちの選ぶ英単語を知ること、教室内は楽しく盛り上がります。黒板の英単語を全員で品詞ごとに分類する作業をすることもできます。

学習指導要領には「生徒が適宜辞書を繰り返し使用し、調べたい単語を辞書を使って自由に調べるということを普段から行わせる必要がある」と述べられています。ゲーム形式の活動を通して辞書を身近に感じてもらうことで、授業でも家庭でも辞書を手段にして学習できる自立した生徒を育てていきたいと考えています。